

ボランティアだより

秋田県立視覚支援学校 秋田県立聴覚支援学校 秋田県立秋田きらり支援学校



「かがやきの丘 ボランティア講座」を開催しました。

7月28日(月)・29日(火)の両日、かがやきの丘3校の主催により、視覚障害児(者)・聴覚障害児(者)・肢体不自由児(者)の支援に関するボランティア講座を開催しました。

毎年たくさんの方から申込いただいているこの講座ですが、今年は高校生を中心に5名の皆様がかがやきの丘に足を運んでくださいました。今回の受講が、ボランティア活動や障害について関心をもっていただくきっかけになればと思います。



講演会「ボランティア・市民活動とは？」

秋田県ゆとり生活創造センター「遊学舎」の宮崎真紀氏を講師にお迎えし、ボランティアの語源や活動の4つの特徴(自発性、社会性、無償性、先駆性・創造性)についてお話いただきました。

ボランティアとは「誰かや社会のために、自分から行動すること」であり、「してあげる」のではなく、仲間として協力し合う姿勢が大切であると教えていただきました。また、活動に当たっては、時間や約束を守ること、そして「頑張り過ぎず、無理をしないこと」が長く続ける秘訣とのことでした。

令和7年度の国の調査では、ボランティア活動に参加した人の約半数が「社会の役に立ちたい」という思いを行動に移しています。一方で、「時間がない」「情報がない」といった理由で参加をためらう人も多い現状があります。活動のスタイルは単発から継続的なものまで様々であり、自分の趣味や特技、すきま時間を活かして参加できることが紹介されました。

また、秋田のボランティアの先駆けとして、文政12年に設立された「感恩講」の歴史にも触れられ、地域を支える精神が古くから根付いていることを学びました。現在は子ども食堂やフードバンク、災害支援など活動内容は多岐にわたります。

「小さな一歩が、誰かの笑顔につながる」という言葉通り、日常の小さな思いやりから始めることの意義や、新しい出会いを楽しむことの大切さを実感できる講演でした。



展示コーナー

かがやきの丘3校で使用されている教材・教具や様々な書籍を、直接手に取っていただきながら、障害への理解を深めていただきました。



視覚支援学校



聴覚支援学校



秋田きらり支援学校

聴覚支援学校「聴覚障害児・者とのかかわり方」

聴覚障害の種類や音の伝わる仕組みを学んだ後、聞こえにくい状態を再現する難聴疑似体験を行いました。言葉の聞き取りにくさや情報が入らないことで「会話についていけない」「状況が分からず不安になる」といった気持ちを体験していただきました。

コミュニケーションのポイントとして、静かな場所で話すことや、口元や表情を見せること、短い文や文字、ジェスチャーを併用して伝えることの大切さを実感していただけたようです。

手話研修では、挨拶や学校生活でよく使う言葉に加え、指文字を活用して「私の名前は〇〇です」と自己紹介をするなど、楽しく表現し合いました。

今回の講座が、手話への関心をさらに高め、聴覚障害のある方とのコミュニケーションに役立てたら嬉しいです。



秋田きらり支援学校「肢体不自由児・者の理解とかかわり方」

今年度のボランティア講座は、車椅子や手の不自由さ、足の不自由さ、身体が不自由な方と関わる際の留意点について学べる体験を準備しました。そして「コミュニケーションを大切にすること」「必要とされている介助をすること（過剰な気遣いではなく）」「安全に留意すること」をお伝えしました。

車椅子体験では、車椅子に乗る方、介助者の両方を体験してもらいました。車椅子に乗っている方の立場になり段差や狭い通路を体験したり、介助者になってどのように声を掛けたらよいか考えたりする機会になったと思います。



視覚支援学校「視覚障害児・者の理解とかかわり方」

「見えない」「見えにくい」方への支援について、講義と体験学習を中心に研修を行いました。ロービジョン体験用眼鏡を使い、「見えにくさ」は視力だけではなく、視野の狭さやまぶしさがあるなど、人によって見え方が様々であることをお伝えし、それぞれの状態に合わせた接し方や情報の伝え方等、サポートの方法を体験していただきました。また、アイマスクを使用して見えにくい方を誘導する「手引き」の体験では、誘導する側とされる側の両方を体験する機会を設定し、両者の気持ちを感じていただきました。相手が分かるように必要な情報を伝えることの難しさを感じながら、相手に寄り添った支援を考えて行動しようとする様子が見られました。

